

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(2)

阿部 聖

Introduction to the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 2

Sei Abe

要約：豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』（第一冊～第六冊）のうち前回の第一冊1944年11月23日～同年12月22日分に続いて、今回は同じく1944年12月25日から1945年1月9日までの分を紹介する。12月後半以降、本土の主要な軍事施設や都市に対する戦略爆撃は、次第に激しさを増してゆく。また、「作戦任務報告書」には記載されない少数機（1～3機）のB-29の来襲が頻繁化するようになった。この少数機のB-29には、既にふれたF-13の他に気象偵察やレーダー偵察などがあるが、日誌を読んでいるとそうした任務を持つと思われるB-29の来襲についての記述も多くなってくる。

キーワード：豊橋, 名古屋, 浜松, 空襲, B29, 少数機, 偵察機, 73航空団

(本誌第1巻第1号より続く)

12月25日(月)

(25) 午前三時高らかに鳴る警戒警報のサイレンに夢破られてハネ起きる。獣め神経戦をねらつてこの真夜中にまたうせたのだらう。暫くしてラジオで少数機が駿河湾に侵入したが東方に向つたといふ。従てこの地方上空に敵機を見ず、四十分余りで解除になつたが骨を刺すやうな寒さには閉口した。

侵入一機 関東へ焼夷弾投下後、脱去

[解説] 25日は、03時00分警戒警報発令(03時40分同解除)。情報では駿河湾に侵入して関東地方に進行した。末尾の枠に「関東へ焼夷弾投

下」と記している。

津の空襲を記録する会(1986年)は、23日と24日にB29が来襲したことになっていて、25日は空白となっている。24日については、午前3時ごろに警戒警報が発令され、同40分ごろに解除されたとしている。

ただ、旧豊西村の記録¹⁾には23日²⁾と25日の来襲が記載されていて、25日は警戒警報発令02時40分、空襲警報発令02時59分、空襲警報解除03時14分となっている。

また原田良次(1973)は、12月23日から26日まで4日連続B-29が少数機(1～2機)で来襲したとしている。同書は、24日にはクリスマスイブにもかかわらず「二〇〇〇より〇五〇三

1) 既出であるが改めて紹介しておく。旧豊西村は、現浜松市豊西町、天竜川沿い浜北区の南に位置する。記録は、豊西村消防(警防)団第四分団が記した空襲の警戒警報および空襲警報の時刻および状況を記した記録簿(1944年7月4日～1945年8月16日)をさす。中央に静岡県警防団連合会浜松支部の名前が入った給与品台帳様式の罫線用紙と同じく浜松板屋町河合織物小組の名前が入った罫線用紙に記録されている(浜松市博物館所蔵)。以下、引用に際しては豊西村(1944-45)と記す。

2) 23日について、豊西村(1944-45)と津の空襲を記録する会(1986)は、それぞれ警戒警報12時36分～13時27分、同じく12時31分～13時30分と記載している。これは原田良次(1973年)や戦史室(1968年)の時間とは大きく異なっている。

までB29各一機来て、一機は江戸川区の二七戸に被害を与えた」と記している。25日には「〇二四五B29来襲」したが、その夜は静かであった(96-97頁)。戦史室(1968)によれば、23日1機ずつ2回(警戒警報00時05分~00時50分と20時58分~22時10分、投弾せず)、24日1機1回(警戒警報02時00分~05時03分、投弾)、25日2機1回(警戒警報02時28分~05時30分、投弾せず)で、26日³⁾の来襲は記録されていない(427-428頁)。こうして見てくると日誌の12月25日、関東への投弾には疑問の余地も出てくるが、日本の空襲編集委員会(1981)『日本の空襲一四』三省堂によれば、横浜市鶴見区と港北区が03時05分~同15分に3機のB-29の来襲を受け爆撃している。

工藤(2003)の写真偵察機F-13の作戦一覧表には、作戦任務4M46(12月20日)から4M49(12月28日)の間の2回分(4M47~4M48)が欠落している⁴⁾ため、どの来襲と対応するのかは確認できない。

いずれにしても、中部地域の情報が関東地域と比較して不統一なのは、クリスマス前後のF-13ないしは少数機のB-29による偵察ないし爆撃が、関東西部地域を中心に行われたためと考えられる。この少数機のB-29による来襲については後にふれることにする。

なお、既述のように11月24日のB-29による日本初空襲の翌日から日本軍はサイパン島のB-29飛行場に対する攻撃を開始した。12月末から1月にかけてもたびたび襲撃を繰り返し、一定の成果を収めていた⁵⁾。

12月27日(水)

(26) 正午を過ぎ五分警戒警報がまた出た。情報によると今日は敵め数個の編隊に分れ次々静岡県下に

侵入し東するもの西するものと分散攻撃の企図らしい。暫くすると敵の一機が北方を高々度で西進するのを見た。相変わらず真白な巨体だ。情報にいふ浜名湖方面から侵入した奴らしい。尋いで御前崎附近から侵入した二編隊は東にそれ、更に志摩半島から侵入した奴が名古屋にも寄らずに東北に向って行くのが北寄りの空に微かに見える。

かくて附近の空に敵影絶へ、二時空襲警報が二十分遅れて警戒警報も解除となった。

来襲五十機七梯団 帝都及其附近にて撃墜十四機、撃破二十七機

[解説] この日、第73爆撃機集団の72機が出撃した。第一目標は中島飛行機武蔵製作所、第二目標は東京の港湾・市街地であった。野戦命令書は、飛行ルートとして御前崎から上陸、北上して甲府付近(35°40'N・138°34'E)をIPとして目標に向かい、爆撃後は房総半島から洋上へ抜けるよう指示していた。作戦任務報告書⁶⁾によれば、6戦隊(72機)が出撃したが、出撃した6戦隊いずれもほぼ指定されたIP上空を通過したことになっている。

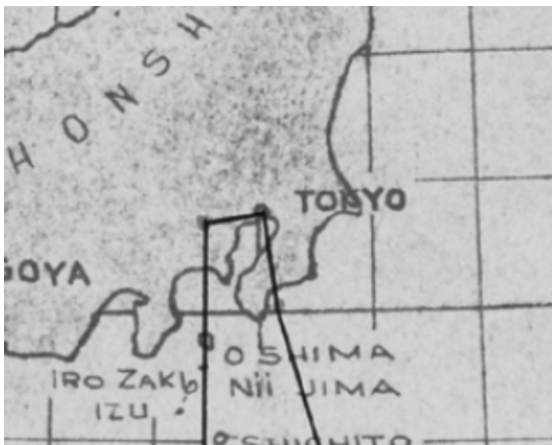
しかし日誌は、当日の様子を次のように記している。「情報によると、(B-29は)数個の編隊に分れ次々静岡県下に侵入した。しばらくして、浜名湖方面から侵入したらしい「敵の一機が…西進するのを見た」。次いで「御前崎附近から侵入した二編隊は東にそれ、更に志摩半島から侵入した奴が…東北に向って行く」のを見た。これか事実とすれば、爆撃部隊は報告書にあるよりも、実際にはかなり広範囲にわたって本土に上陸したことになる。当日の日本の戦闘機による攻撃は約140機により272回、目標上空の対空砲火は一般に中程度であったと報告された。

3) 原田良次(1973年)は、26日については「夜二一四五警報あるも、出動せず。B29単機の模様なり」(98頁)と記している。

4) 工藤洋三(2013)174頁。

5) とりあえず、チェスター・マーシャル(2001年)『B-29日本爆撃30回の実録』(高木晃治訳)ネコ・パブリッシング、118-143頁参照。

6) 『作戦任務報告書』No.16。



第13図：1944年12月27日の飛行ルート

出撃機72機のうち1機が離陸直後に不時着水し、39機が第1目標を爆撃、GP 160発・40トン、焼夷弾253発・63.25トンを投下したが、与えた損害はわずかで、期待された成果を上げることはできなかった。9機が第2目標および最終目標を爆撃、GP 48発・21トンを投下した。また、4機が臨機目標を爆撃した。19機が指定された目標の爆撃に失敗し、このうち16機は爆弾を投棄、3機は基地へ持ち帰った。最終目標として爆撃されたのは、横浜周辺、静岡アルミニウム工場などであった。また、臨機目標には大王崎付近の船舶がふくまれている⁷⁾。

浜松市の記録ではこの日、12月13日につづいてB-29による2回目の空襲(飯田村)があったとされている⁸⁾が、米軍資料には最終目標または臨機目標として浜松に投弾したという記録はない。

なお、アメリカでは同じ12月27日対日爆撃について新たな展開が生じていた。この日、第21爆撃機集団司令官H・ハンセル准将は、記者会見で対日爆撃について「われわれは、全部の爆弾を落とそうと思っているところに正確に落とすわけではない。…われわれはまだ初期の

実験段階にある」と述べて、陸軍航空軍司令官H・アーノルドの怒りを買った。この発言は後にハンセルをC・ルメイに交代させるきっかけとなったと言われている⁹⁾。

12月30日(土)

(27) 風邪で早寝した所、夜半ふと眼をさますと警戒警報のサイレンが鳴って居る。時計を見ると午前二時へ少し前だ。畜生めまたうせたかとはね起る。余り寒いのでお茶でも吞まうと沸しにかゝるとまだ沸かない内に解除、この間僅かに二十分。何でも少数の適が名古屋方面へ来たらしいが詳細不明。

侵入一機 被害なし

[解説] 午前2時少し前に警戒警報が発令されたが、わずか20分で解除になった。

津の空襲を記録する会(1986年)にも、30日は01時35分～同47分の警戒警報が記されているのみである。

豊西村(1944-45)には、29日は午前か午後不明であるが警戒警報(8時33分～8時55分)が、30日には2度の警戒警報(午前1時12分～同40分、3時15分～4時)が出ている。

これに対して戦史室(1968)によれば、28日には四編隊が来襲、14時24分に警戒警報、15時43分に空襲警報が発令された。B-29は29日にも来襲し、警戒警報(20時30分～21時55分)が発令された。30日には1機ずつ2機来襲し警戒警報が01時05分～02時35分と03時35分～04時28分に発令されている。2度目は投弾が記録されている(428頁)。

原田良次(1973)も28日については、「一四二四警戒警報発令、B29十数機房総半島南方上空より侵入、一五四〇鹿島灘方面よりB29六機本土侵入。…東京の空に火が上がった」と記している。29日は「B29二〇三〇来襲」、30日は「〇一〇〇よりB29一機来襲。…〇三三五また一機

7) 同上。

8) 浜松空襲・戦災を記録する会(1973)292頁。同資料(警察署資料)によれば、B-29の来襲は1機で250キロ爆弾8発、焼夷弾4発を投下、全壊・半壊各1戸の被害があった。

9) カール・バーガー(1971)154頁。

来襲、…情報は浅草方面の火災を報じた」の記述がある（103-104頁）。

1944年中の第73航空団の作戦は、12月27日の中島飛行機武蔵工場が最後であり、F-13の作戦も12月28日（東京地域：立川航空基地、成増飛行場など）と12月31日（西南諸島：南北大東島、那覇など）の2日間だけである¹⁰⁾。サイパンから東京までの距離（約2400km）と時間（約6時間）を考えても、30日の午前1時～3時に東京上空に現れることは不可能なので、ここでもそれ以外の目的のB-29が日本に来襲していたことは明らかである。

12月31日（日）

(28) 午前〇時半又してもB-29らしい敵機の侵入に警戒警報が鳴り出した。ソレツと許りはね起きると続いて空襲警報だ。敵め今夜も少数機で浜名湖方面から侵入し我が郷土の上空を通つて名古屋へ向つたらしい。

去る廿七日大挙してやつてきて完全にやつ付けられた敵は、それ以来神経戦をねらつて夜になると少数機で再三やつて来ては安眠を妨害する。然し一機でも爆弾も持つて居れば、焼夷弾も持つてゐるので捨て、も置けぬ。張り切つて待機すること三十分、適は遠く海上に去り一時空襲警報に続いて警戒警報も解除された。天には下界のこの騒ぎを十六夜の月が静かに見守つてゐた。

侵入一機 偵察の後脱去

(29) 午前五時に十分前またまた警戒警報に続いて空襲警報が明けやらぬ暁の空に鳴り渡る。それつ切り物音一つしない静かな暁だ。暫くすると南の空に聞へる爆音に退避の鐘がなる。愈々うせたかと耳をすますと爆音は東南二川方面にありと知らせてくれる。間もなく敵は南方海洋上に遁走し五時二十五分凱歌を奏するやうに高らかに解除のサイレンが鳴つた。それを合図に婆さんは起きて朝餉の支度にかゝる。

侵入一機 焼夷弾投下後脱去

(30) 叩かれても叩かれても懲りもせず、またもや

敵に我が本土に迫らんとし大晦日の然も夜の十時といふに今日三度目の警戒警報が鳴り出した。尤も年末から年始にかけ来襲が予期されてゐたので敢えて驚くものもない。

風もない静かな夜だ。出て見ると外は皓々たる月明だのに家の中は真暗だ。その真暗の中で茶を沸して先づ一杯のむ。考へて見れば自然と今の人生とが余りにもかけ距れて一致しないこと夥しい。情報によれば洋上に我をめぐらして北上する敵機がありとか。待つこと一時間、十一時になつても次の消息がない。いつでも退避出来るやうにしてまゝよと一先づ床にもぐる。

侵入一機 帝都を侵して脱去

[解説] 日誌は、大晦日には3回の警戒警報（00時30分、04時50分、22時00分）と2回の空襲警報があったと記している。

名古屋空襲を記録する会（1986）は、名古屋地区が被弾した1回の来襲を記録している。00時07分警戒警報発令、00時15分空襲警報発令、00時46分空襲警報解除、00時50分警戒警報解除。B29、1機が潮岬→三重→名古屋→浜名湖を通過して、瑞穂区（山中）に焼夷弾を投下した（8頁）。津の空襲を記録する会（1986）によれば、1回目は00時17分警戒警報・空襲警報発令、同50分空襲警報解除、同52分警戒警報解除、2回目は04時37分警戒警報・空襲警報発令、05時09分空襲警報解除、05時12分警戒警報解除、3回目は21時30分警戒警報発令、同52分同解除となっている（14-15頁）。

豊西村（1944-45）は、00時07分警戒警報、同17分空襲警報、04時30分空襲警報解除、04時35分再び空襲警報発令、そして夜9時37分警戒警報発令と情報は断片的であるが、日誌他とはほぼ対応しているとみてよい。

戦史室（1968）は、東京付近への2度の来襲を伝えていて、1度目は21時25分警戒警報発令、22時10分同解除、2度目は23時50分警戒警報発令、00時30分同解除となっており、いずれ

10) 工藤洋三（2013）174頁。

も投弾した(428頁)。原田良次(1973)は、22時40分と23時50分に「警報とともにB-29が1機来襲、遠く東京の空に火が上がった」と記している(106-107頁)。この日のB-29の来襲は、00時台と04時台は中部地区、22時台と23時台は関東地区であったと推測できる。

この日の爆撃について、第73航空団第499爆撃群団第878戦隊に所属するB-29パイロットの日記によれば、12月31日に「1944年最後の、そして新年最初の飛行を東京上空に送り出すという栄誉を担った。…気象偵察爆撃任務飛行に出動して、真夜中近く東京に爆弾を投下した」¹¹⁾。この気象偵察については「気象偵察機は昼夜を問わず送り出されており…データを三十分ごとに基地に送信している。司令部では大きな空襲にあたっては、この最新情報に基づいて日本で気象条件の一番有利な目標を選んで爆撃することがきる」と解説している。1945年1月に入っても現状では確認が難しい少数機による来襲と爆撃が繰り返されるが、その多くは気象偵察爆撃や写真偵察の任務飛行である可能性が高いといえよう。

B-29の少数機出撃としては、気象偵察爆撃、写真偵察(F13)、レーダー偵察およびレーダー対策、海上哨戒、戦闘機の護衛、試運転などがある。このうち1944年11月から1945年2月までのB-29の気象偵察爆撃機とF-13写真偵察機の出撃回数を示すと第4表の通りである。気象偵察爆撃機は12月に64機、1月に74機出撃しており(ただし原資料の状態が極めて悪く正確さに不安が残るため暫定表として示す)、頻繁に日本上空で気象偵察任務を果たすとともに、爆撃も繰り返していた¹²⁾。

なお12月27日の記述の末尾の「撃墜十四機、撃破二十七機」など、それまでの日本側の戦果

第4表：1944年11月～1945年2月のB29の気象偵察爆撃とF13による写真偵察の月別出撃機数(暫定表)

年月	気象偵察爆撃 (B29)			写真偵察 (F13)		
	出撃	効果 出撃	航空機 の損失	出撃	効果 出撃	航空機 の損失
1944年11月	0	0	0	28	不明	2
12月	64	57	2	27	不明	1
1945年1月	74	69	0	35	不明	0
2月	83	75	2	42	38	0

(注) 不明は資料の判読不能を意味する。

(出所) Twentieth Air Force, *A Statistical Summary of Its Operations against Japan*, Entry56-Operations Reports and Statistical Summaries of the U.S. Army Air Forces and Bomber Commands in the Pacific より作成。

発表の内容が操作されたものであることについては既に触れた。戦史室(1968年)によれば、日本軍の発表として27日の戦果は、撃墜5機(うち体当たりによるもの2機)、撃墜不確実5機、撃破25機などであった(425頁)。戦果についての情報も管区を通じて統一されていたわけでもなかったようである。

日誌には「完全にやつ付けられた敵は」、「叩かれても叩かれても」、「再三やって来ては安眠を妨害する」といった記述が散見されるが、日誌の1944年11月24日以降、同年末までの撃墜機の機数は88機(11月24日の撃墜破4機分を除く)、撃破71機となる。第十飛行師団長の日記は、撃墜確実28機、撃墜不確実24機、撃破60機としている¹³⁾。これに対して米軍発表の同期間の損失機は、第3表からも明らかなように22機であった。

昭和二十年を迎えて

戦雲漂ふ真只中に昭和二十年の新春を迎へた。大東亜戦争開始以来正に四度びめの新年だ。

11) チェスター・マーシャル(2001), 162頁。

12) 奥住喜重(2006年)は、気象観測爆撃には日録が存在し、またB-29以外にもB-24リベレーターが行動した記録があるとしている(50頁)。John F. Fuller(1990), *Thor's Legion: Weather Support to the U.S. Air Force and Army, 1937-1990* American Meteorological Societyによれば、B-29が初めて東京への気象偵察任務に就いたのは1944年12月であった。これとは別に1945年1月に第21爆撃機集団を支援するためにB-24で構成される第655気象偵察戦隊が創設された。

13) 戦史室(1968)428頁。

緒戦に立ち遅れた敵は躍起の反抗に物量にものをい
はせ、我は肉弾につぐに肉弾を以てこれを屠り去ら
んとし、決戦につぐ決戦は苛烈にしてまた凄絶。今
は前線と銃後の差別はない。従て敵の我が本土に対
する空襲は愈々頻繁に愈々大規模ならんとし、場合
によつては敵の本土上陸さへ夢ではなくなつた。全
国民の誰しもは必死報国の一念に国土の防衛と兵器
食糧の増産に敢闘し聊かの緩みもない。
三千年を鍛へに鍛へた大和魂の本領を発揮するのは
今を措いて外にない。老たりと雖も我また国家の一
員として御奉公の誠を尽すに苟も人後に落ちるやう
なことがあつてはならぬと考へる。

昭和二十年一月一日の朝 豊田珍彦

とつて年六十四

【解説】太平洋戦争開始から4年目の新年を迎え、
戦況の悪化はすでに十分感じられていたものと思
われる。年頭の言葉には悲壮感がただよう。「我は
肉弾につぐに肉弾を以て」敵に対するしかなく、す
でに「前線と銃後の差別はな」いばかりか、目の前
には「敵の本土上陸さへ夢ではなくなつた」現実が
あつた。

1944年10月のレイテ沖海戦敗北とサイパン島
への第73航空団の配備等を受けて日本本土におけ
る航空作戦を行う部隊の創設が必要となつて、昭和
19年12月26日に第六航空軍が新設された。同航空
軍の主要部隊のうち、第十、第十一および第十二
飛行師団は、それぞれ東部、中部、西部の各軍司令
官の指揮下におかれた。しかし、前掲第十飛行師団
長の日誌は「予期したる戦果を上げ得ざりし主原因
は我の科学技術の立ち遅れに存し、その欠陥を補ふ
為に無理と知りつつ無理を強行せざるを得ざりき」と
B-29撃墜の半数以上が「無理の強行」すなわち特
攻隊による体当たりによるものであつた。現実には
「物的不備は精神力の充実に依りて之を補う他ない
状態であつた¹⁴⁾。

第5表：1945年1月のB29のサイパン島からの出撃日
と攻撃目標

月日	爆撃目標	月日	爆撃目標
1月3日	名古屋港湾および市街地	1月23日	三菱重工名古屋発動機製作所
1月9日	中島飛行機武蔵製作所	1月24日	硫黄島の飛行場
1月14日	三菱重工名古屋航空機製作所	1月27日	中島飛行機武蔵製作所または三菱重工名古屋発動機製作所
1月19日	川崎航空機明石工場	1月29日	硫黄島の飛行場
1月21日	モエン島の飛行場		

(出所) 工藤洋三企画・制作[2009年][XXI Bomber Command Tactical Mission Reports Mission No. 1 to No.26]より作成。

1945年の日誌の内容に入る前に、1945年1月のサイ
パン島からのB-29による本土空襲の状況を整理して
おく¹⁵⁾。まず、本土空襲は、1945年1月中もほ
ぼ東京地域(中島飛行機武蔵製作所、東京工業地域、
東京市街地)と名古屋地域(三菱重工名古屋航空機
製作所、同発動機製作所、名古屋市街地)の爆撃が
中心となつた。ただし1月19日にははじめて東京、
名古屋以外の施設が目標にされた。なお、同年1月
中のサイパン島からの出撃は計9回、モエン島およ
び硫黄島飛行場の爆撃が計3回、本土空襲は、1月
3日から計6回であつた(第5表)。

また、1月中の第73航空団による本土空襲の
詳細は第6表の通りである。特徴的なのは1月3日
に本土空襲でははじめて航空機工場以外の目標、
すなわち市街地および名古屋港湾が第1目標とな
つたこと、そして第7表からも明らかのように、
この日の爆撃では、それまでの一般目的弾(GP)
ではなく収束焼夷弾(M18:6ポンド焼夷弾M-69を
集束した爆弾と思われる。搭載爆弾の約9割を占
めた)と破碎収束弾(T4E4)が使用されたことであ
つた。

このような爆弾の搭載例は、1944年11月30日

14) 同上、428-429頁。B-29に対する特別攻撃隊の編成は、吉田喜八郎第十飛行師団長が1944年11月7日に指揮下の各飛行戦隊に対してそれぞれ4機の特別攻撃隊の編成を命じたのが最初であつた。特別攻撃機は上昇性能を補うため、酸素発生装置、無線装置および射撃照準器以外の装置はすべて取り外した(同405-407頁)。

15) 阿部聖(2010)「浜松空襲に関する米軍資料『作戦任務報告書』-1945年1月の浜松空襲」浜松史跡顕彰会『遠江』第34号参照。

第6表：1945年1月の第73航空団による本土空襲

年月日	第1目標	第2目標	目標上空の天候(雲量)	第1目標投弾機	第2目標投弾機	その他有効機	損失機	死者・()内不明者数
1945年								
1. 3	名古屋港湾・市街地	なし	6/10	57/97		22	5	(52)
1. 9	中島武蔵製作所	東京市街地 (最終目標)	2/10	18/72		33	6	(67)
1.14	三菱名古屋航空機	なし	4/10	40/73		23	4	(34)
1.19	川崎重工明石工場	なし	2-3/10	62/77		8	0	(0)
1.23	三菱名古屋発動機	名古屋市街地	9-10/10	28/73	27	5	2	1 (17)
1.27	中島武蔵製作所	東京の港湾・市街地	10/10	0/74	56	6	8	(77)

(出所) 工藤洋三企画・制作 [2009年] より作成。

第7表：爆撃に際して積載した爆弾と投下データ

年月日	第1目標	搭載爆弾	投下データ
1945年			
1. 3	名古屋港湾および市街地	350lb M18 (集束焼夷弾) 420lb T4E4破砕集束弾	第1目標：IB789発・FB55発, 最終目標：IB258発・FB19発他
1. 9	中島飛行機武蔵製作所	500lb GP 爆弾	第1目標：168発, 臨機目標：314発他
1.14	三菱名古屋航空機製作所	500lb GP 爆弾	第1目標：377発, 最終目標200発他
1.19	川崎重工明石工場	500lb GP 爆弾	第1目標：610発, 最終目標：55発他
1.23	三菱名古屋発動機製作所	500lb GP 爆弾 500lb M-76 (焼夷弾)	第1目標：GP196発・IB136発, 第2目標：GP189発・IB135発他
1.27	中島飛行機武蔵製作所	500lb GP 爆弾 500lb M-76 (焼夷弾)	第2目標：GP439発・IB216発, 最終目標：GP24発・IB12発

(出所) 工藤洋三企画・制作 [2009年] より作成。

第8表：野戦命令書に示された目標別の飛行ルートとおおよその上陸・IP・離岸地点

年月日	中島飛行機武蔵製作所, 東京市街地・港湾など				名古屋三菱重工航空機製作所・同発動機製作所, 名古屋市街地・港湾など			
	コース	上陸	IP	離岸	コース	上陸	IP	離岸
1945年 1月3日					A	高砂	鋸崎	浜名湖
					B	高砂	琵琶湖	浜名湖
					C		伏見	浜名湖
1月9日		大王崎	甲府	房総半島				
1月14日						紀伊水道	和歌山	浜名湖
1月19日*						紀伊長島	和泉大津	紀伊水道
1月23日						潮岬	近江八幡	三河湾
1月27日		浜名湖	甲府	房総半島				

(注) *1945年1月19日の空襲は、第1目標が川崎重工明石工場。

(出所) 工藤洋三企画・制作 [2009年] より作成。

の東京工業地帯に対する初めての夜間空襲の時以来であった。さらに第2目標に市街地や港湾が指定された1月23日と1月27日の爆撃では一般目的弾と焼夷弾(M-76: 発火力の強い大型マグネシウム爆弾)を併用している。

1月の東京地域への2回の爆撃の際に際してとられた飛行ルートは、大王崎または浜名湖が上陸地点で甲府をIPとして攻撃目標に向かい

房総半島から離岸するものであった。名古屋地域に対する飛行ルートは紀伊水道周辺から上陸し、琵琶湖または周辺をIPとして浜名湖付近から離岸するケースがほとんどであった(第8表)。

一月二日(火)

戦雲たちこめる中に明けた昭和二十年の一月元旦我

が郷土の空にこそ敵影を見なかつたものゝ、マリアナの敵は大晦日の除夜のころとまだあけやらぬ元旦の暁五時頃一機づゝで帝都に侵入し若干の焼夷弾を撒き、また九州方面へは支那大陸を基地とする敵二機が侵入し偵察を行つたといふ。

元旦からこの始末だから油断も隙もあつたものでない。とはいへ已に空襲も三十四回の試練を経て敢闘の熱意は烈火の如く防衛の態勢は鉄楯の如しで女子供までが聊かも動ずる気色もないのは頼母しい限りだ。

〔解説〕豊橋地方は1月元旦、二日と平穏だったようである。この二日間は、三重にも警戒警報、空襲警報とも出ていない。ただ豊西村(1944-45)には、1月1日04時43分警戒警報発令、「御前岬ヨリ浜松北方ヲ愛知県ニ侵入セリ」の記載あるも、05時03分警報解除となっている。

日誌が述べているように元旦は東京方面にB-29の来襲があった。原田良次(1973年)は、12月31日に続いて00時05分警戒警報発令。さらに05時00分にB-29が1機侵入して下町に焼夷弾を投下したと記している(108-109頁)。

F13は12月31日に続いて1月1日から9日まで連日出撃しているが目標地域はいずれも沖縄(5日だけは名古屋へも出撃)であった。しかし、沖縄地域は雲のためこの間の写真撮影はほぼ失敗に終わった¹⁶⁾。

一月三日(水)

(31) 今日今年初めての然も相等大がゝりな敵の爆撃を受けた。その模様はこうだ。

元旦から来るだろう来るだろうと待ち構へた敵は二日にも姿を見せず。三日のけふも来るとか来んとか噂してゐるとたん。午後二時けたゝましくサイレンが鳴り出した。ソラ来たと許りに立ち上る。班長の渡辺さん^{ママ}風で就寝中とて代理してくれといはれるので早速組を一廻りする。情報によると今日は敵め名

古屋と京阪とを指し殆んど全力を挙げて来たらしい。編隊が後から後からいくつとなくやつてくる。その侵入路も浜名湖附近の外に志摩半島からも潮岬からも更に舞鶴方面からもやつて来たといふ。そこで先づ東の方を警戒してゐたが晴天でありながら余りにも高いためか爆音許りで姿が見出せない。ふと南天を見ると鮮かな飛行雲が三筋と少し距れてまた一筋。よくよく注して見ると微かではあるが西進する敵機が見へる。それが通過する頃漸く空襲警報のサイレンが鳴り出した。

続いて北東から二、二、一の五機編隊が南西さしてこれも恐ろしい高さでゆく。それと交叉するやうに例のコースを六機編隊が西にゆく。尋いで別の五機編隊が南西さしてさきの五機を追つて居る。何分今日は天候の都合で、ある一部の外飛行雲が現れないので日光に反射する時の外は爆音ばかりで姿の見へないのが聊かきがゝりだ。こやつら南方から侵入した奴と共に大事な名古屋をめざすらしい。

その内に敵は浜松に焼夷弾を落した。名古屋にも落したといふ情報だ。暫くすると頭の上で爆音がる。敵らしいぞと云ふ間もなく高射砲がなり出したので壕にもぐる。地響してくるその音は余り気持ちのよいものではない。上空では機関銃がバリバリ鳴つて居る。味方機が邀撃してゐるのだろう。

漸く静かになつたので出て見ると、あちらにもこちらにも航跡が残つて居り、相変らず爆音許りだがそれも追々遠ざかつてゆく。どれほど時間がたつたか知らぬ。ふと北方を見ると敵の十数機が一群となつて東南さして遁走してゐる。続いてまた二十数機が四編隊でその後を追つてゆく。それが東に廻つた頃空襲警報が解除されホッとする。間もなく又しても空襲警報だ。まだ何処かの空に居残つた奴があつたのだらう。勿論姿など見へないがもう大丈夫と多寡をくくる。暫くして二度目の解除のサイレンが鳴る。時計を見ると丁度四時だ。

重荷を降ろしたやうな気がして東を見ると多米峠の上に黒烟が濛々と立ち上がつて居る。先程情報で浜松市がやられたといふからそれが大事に至つたもの

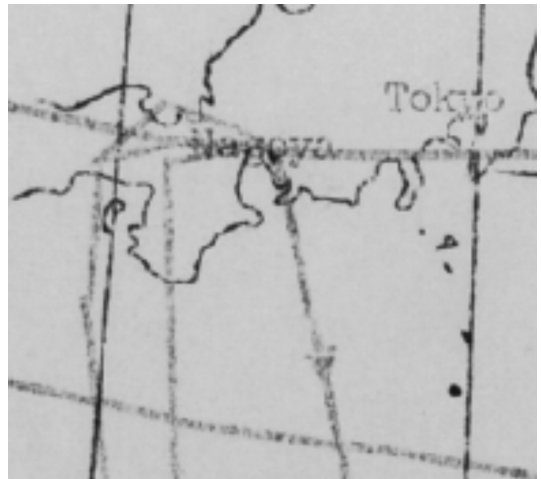
16) 工藤洋三(2001年)「写真偵察機F13」『空襲通信』空襲・戦災を記録する会全国連絡会議、38頁および工藤洋三(2013年)175頁参照。

らしい。何といふ憎らしい敵の仕業だろう。名古屋もあの通りではなかろうかと案じられてならぬ。それにしても敵がいつも我が上空を通りながらまだ弾一つ落さないのが不可思議だ。何れ一度は洗礼をうける時もあるだろう。その時に備へて一層防備を整へ不撓不屈の精神を固めねばなるまいぞ。

来襲九十機十梯団 四十二機撃破

【解説】 1月3日の攻撃目標は名古屋の港湾および市街地を目標として97機が出撃した。良く知られているように、この爆撃はハンセルが司令部の要求に応じて行った市街地への本格的な焼夷弾爆撃の実験でもあった¹⁷⁾。飛行ルートは、それまではAとBの2つのルートをとることが多かったが、この日はA, B, Cの3つのルートが予定された(第7表参照)。Aルートは、紀伊水道(33° 30' N・134° 45' E)から進入、兵庫県高砂市付近(34° 45' N・134° 45' E)から上陸して福井県大島半島の先端にある鋸崎(35° 32' N・135° 39' E, 米軍資料の表記はCAPE NOKOGIRI)をIPとして目標に向かうもの。Bルートは高砂市付近まではAと同じで、同地点からほぼ東へ向かい「琵琶湖の首」をIPとして目標に向かうもの。Cルートは、上陸地点は不明であるが京都伏見(34° 56' N・135° 46' E)をIPとして目標に向かうものであった。爆撃後は伊勢湾や三河湾・浜名湖などから太平洋上へ抜ける予定であった¹⁸⁾。

作戦任務報告書は、悪天候等により一部齟齬を来したものの、全般的には航行は良好であったと記している。しかし、2戦隊(497群団)は東寄りルートA、3戦隊(498群団)は中央ルートB、そして5戦隊(499および500群団)は西寄りルートCをたどったと述べており、野戦命令とは異なるルートを利用したとも受けとれる。第14図(横線は等圧線)からも明らかのように報告書に示された飛行ルートは、潮岬



第14図：1945年1月3日の飛行ルート

から上陸していわゆる琵琶湖の首をIPとして目標に向かうものなど3つであった¹⁹⁾。

日誌はこの日の豊橋上空の様子を「情報によると…名古屋と京阪を目指し殆んど全力を挙げて」やって来た。「編隊が後から後からいくつとなくやつてくる。侵入路も浜名湖附近の外に志摩半島からも潮岬からも更に舞鶴方面からもやつて来た」が、高高度で飛行しているため「ある一部の外飛行雲が現れないので日光に反射する時の外は爆音ばかり」で機体を十分には確認できなかった。やがて高射砲が鳴り出し、上空では機関銃の射撃音が聞こえたと記している。

米軍資料によれば、日本の戦闘機による攻撃は約160機により346回、対空砲火は一般に貧弱であった。日本側の資料は、第11飛行師団長は飛行第56戦隊を阪神へ、第23飛行団を名古屋上空に配置したが、飛行第56戦隊が高高度に達しないときにB-29は大阪を経て名古屋に向かったため、同戦隊を名古屋へ移動させた。また、第10飛行師団長は、飛行第244戦隊主力に浜松上空高高度配置するなどしたが、B-29が名古屋

17) チェスター・マーシャル(2001), 155頁。

18) 「作戦任務報告書」No.17。

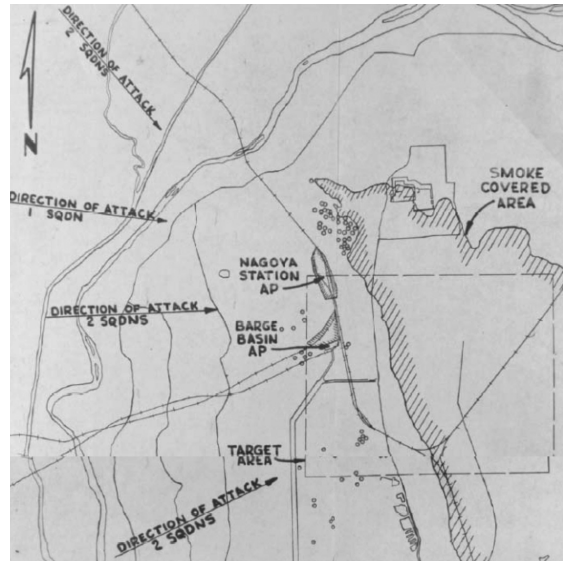
19) 豊西村(1944-45)は、「伊豆下田南方より駿河湾、清水、大井川上流ヲ信州方面へ侵入、主力ハ名古屋ヲ爆撃、浜松南方海上ニ脱去セリ」と記している。



第15図：1945年1月3日の爆撃写真

へ向かったことを知り、当時渥美湾上空にいた244戦隊に名古屋防空に協力させ、独立飛行第17中隊戦闘班を浜名湖に移動させて退路の遮断を命じた²⁰⁾。米軍はこの日、5機のB-29を失い、52人の行方不明者を出した²¹⁾。

出撃した97機のうち57機は、第1目標を爆撃、IB789発、138.08トン。FB55発、11.55トンを投下した（第15図参照）。19機（1機は第1目標も爆撃）が最終目標（大阪、田辺、新宮、尾鷲、浜松など）に、IB258発、45.15トン、FB19発、3.99トンを投下した。3機が臨機目標を爆撃、19機は爆撃に失敗し爆弾を投棄した。目標周辺には約75カ所の火災が確認されたが、



第16図：1945年1月3日の爆撃写真の解説図

煙雲のため爆撃の結果は測定できなかった²²⁾。

第16図は、第15図の解説図であるが、当日の目標地域（TARGET AREA）は点線で囲まれたほぼ正方形の地域である。この正方形には名古屋駅の一部と金山駅も含まれている。地図中に「NAGOYA STATION AP」という文字が見えるが、APはAiming Point（照準点）略語である。すなわち爆弾投下の目印である。APはもう一つ、駅南にある船だまり（BARGE BASIN）にも設定されている。その北にある関西線と近鉄線の分岐点の南側は現在の愛知大学笹島校舎がある場所である。

攻撃方向は矢印で示されている。ただ火災は煙に邪魔されて目標地域で発生しているかは不明であるが、名古屋駅の北側、目標地域を示した正方形の点線の北側で発生していることははっきりわかる。その東側の実践で囲まれた部分は名古屋城である。名古屋空襲を記録する会（1986年）によれば、名古屋市では死者67人、負傷者294人、全焼家屋2595戸であった（8

20) 戦史室（1968）433-434頁。

21) 米軍側の発表によれば、損失機5機のうち、1機は戦闘機によるもの、3機は原因不明、1機は海上で墜落したものであった。

22) 「作戦任務報告書」No.17。

頁)。

なお、上記の最終目標を爆撃した19機のうちの9機が浜松を爆撃し、IB118発、20トン、FB9発、2トンを投下した。日誌は「多米峠の上に黒煙が濛々と立ち上がつて居る。先程情報で浜松市がやられたといふからそれが大事に至つたものらしい」と記している。浜松の記録では5機のB-29が来襲して、植松、神立、天神、名塚、向宿、子安各町に焼夷弾を投下した(死亡2人、全壊家屋69戸)²³⁾。

一月四日(木)

(32) きのふひるま大挙してうせた敵は、夜に入つて偵察でもする積りだらう。またうせたと見へ真夜中午前一時といふにまたしても警戒警報が発令された。情報によると少数の敵機が名古屋に侵入し焼夷弾を撒いた後遁走したといふ。これは三十分余りで解除になつたがどうした事か私も婆さんもすっかり眠つてゐたと見へ全然しらなんだ。

侵入一機 まもなく脱去

(33) 前のが脱去して間もない午前二時また警戒警報だ。畜生またうせたかとはね起きる。下弦の月は微にこのよを照し凍るやうな夜寒だので、たき火でお茶を沸かし一杯飲んで居ると爆弾の炸裂音とも高射砲の音ともつかぬ地響が硝子戸をがたつかせる。敵は近いらしい。寢床にゐた婆さんと呼んで待機する。

次の情報で敵はやはり少数機で名古屋に侵入し若干の投弾をやつて遁走中だといふが一方大坂にも敵機の侵入を見たらしい。待つこと一時間。午前三時になつてもその後の消息がわからない。いつまでもうろついて居る敵でもなし、寝にかゝつた三時二十分警戒警報は解除になつた。

この両度とも敵の侵入をみながら空襲警報は発令されなんだのは、敵は少数であり局部的なので各人の状況判断に任されたものと思われる。

侵入一機 爆弾少々投下して脱去

(34) もう寝やうとする午后の七時遠州灘を北上する不明機のため警戒警報が発令された。寒いけれど

も風もない静かな夜だ。仰いで満天に輝く星を見るとこれが生死を賭する戦場だとして思はれやう。情報によるとこの不明機は接岸と共に進路を東にかへたとか。従つてこの辺りに敵影なく僅か三十分許りで解除になつた。

侵入一機 豊橋に焼夷弾投下

[解説] 1月4日は01時00分に警戒警報(約30分後解除)、02時00分第2回目の警戒警報が鳴つて間もなく「爆弾の炸裂音とも高射砲の音ともつかぬ地響」がした。名古屋と大阪に侵入したという情報が入つたがその後消息はつかめないうまま、03時20分ようやく警戒警報が解除された。さらに午後19時00分に警戒警報が発令されたが、約30分で解除となつた。3度目の来襲には「この辺りに影響なく」としながらも最後に「豊橋に焼夷弾投下」と記しているが、それに対応するような記録がない。

名古屋空襲を記録する会(1985)によれば、1月4日00時25分に1度目の警戒警報が発令(01時10分同解除)され、01時55分に2度目の警戒警報が発令(03時15分同解除)された(いずれも陸上における発令時刻。以下も同様)。来襲機はいずれもB-29、1機で、伊勢湾から名古屋へ侵入し岡崎を通過して浜松から離岸した。1度目は中川区に、2度目は挙母地区などに投弾した(9頁)。津の空襲を記録する会(1986)は、00時27分~01時05分、01時51分~03時10分、18時46分~19時29分の3回の警戒警報を記録している(16-17頁)。

豊西村(1944-45)によれば、この日の警戒警報発令は2回。1度目は06時59分~07時46分で「志摩半島ヲ半田、蓬萊寺山上空ヨリ浜松南東方海上に脱去」としているが、他の記録では触れていないため、多少疑問の余地が残る。2度目は19時30分~19時48分で「焼夷弾当地ヨリ見ユ、富岡村ニ落下火災アリ」と記している。富岡村(現在は磐田市豊岡)は、戦時中は磐田郡富岡村で天竜川をはさんで豊西村のほぼ対岸

23) 浜松空襲・戦災を記録する会(1973)290頁。

にあった。

原田良次（1968）は「一九〇〇より B29一機、浜松一駿河湾を経て静岡に焼夷弾投下」（115頁）と記しているが、静岡市にその記録はない。

一月五日（金）

(35) 夜半〇時を過ぎること十分、また警戒警報が鳴り出した。情報によると少数機が中地区に侵入したが、間もなく熊野灘方面へ脱去したといふので僅か二十分許りで解除。

侵入一機 奈良附近偵察脱去

(36) 午前五時半まだ明けやらぬ夜空にもまたまた警戒警報だ。耳をすますと頭上に爆音が聞へる。はてなと情報をきくと浜名湖附近から侵入した敵一機が愛知県の東部上空を旋回中だといふ。退避信号がこちらでもこちらでも鳴り出した。遠くの爆音を追つてみると、西方遙かあなたにバラバラの火が落ちる。敵め焼夷弾を落したに違いない。がその後火の揚らない所を見ると損害のないらしいのが何よりだ。

間もなく敵は渥美半島から南方洋上に去り。三十分許りで警報は解除になったが、名古屋へも行かず東三地方だけで終つたのは始めてだ。

侵入一機 岡崎に焼夷弾投下

(37) 甥の入営を送つて早朝家を出、二三用達しと午前十時萱町にあり。突如警戒警報のサイレンが鳴り出した。敵めまたうせたかそこそこに飛び出し大急ぎで帰途につく。

本町の通りへ出るとまるで人の波だ。それぞれの持場へ急ぐ人たちだろう。西八町で市の中央をよぎる二機一隊の敵が西南に向ふのを見る。東八町までくると別の一機がそのあとを追つて頭上に居る。方々で退避信号を打つて居るが真上ならもう安全と退避もせずに帰宅した。敵はそのまゝ、南方に逃避したらしい。家に帰ると間もなく警報が解除された。この間僅かに三十分。お陰で一汗かいたことだつた。

侵入数機 名古屋、浜松を偵察脱去

敵の爆撃が漸く熾烈化すると共に航母（航空母艦一筆者）を基幹とする敵機動部隊の我が近海に出没が噂され、或は無暴極まる敵が我が本土上陸といふや

うな場面がいつ展開されぬとも知れない情勢となつて来た。従つてこの東三の天地がいつ彼我しのぎを削る戦場となつても慌てないだけの覚悟が必要となつて来た。

大体この附近に敵の侵入を見るかも知れないといふ理由は浜名湖から西へ渥美半島一帯が敵の上陸には持て来いの地形なので一挙に我が中枢部に突入し東西の連絡を絶ち半身不随に陥らせやうとの作戦に出るだろうといふ憂慮でこれに対しいくら敵でも最も軍備の充実して居るこの中枢部へ遮二無二突入するやうな愚はしないだろう。恐らく我が本土へ上陸を企図するなら台湾とか九州とかへ先づ上陸を試み、それが成功した暁に於て本州へ手を伸すだろうから真先にこの附近が戦場にならうとは考えられぬとの説もある。

その何れにした処で最悪の場合に処するだけの覚悟は必要で、万一さういふ場合ともなれば老人や女子供は五里や十里は山奥でも避難せねばなるまいが、然し何万といふ人の立退きは実際容易ならぬことでその場合縁故の有無など問題ではない。そこで私等如き老人は当然立ち退かされるが、その場合第一に考へられるのは生まれ故郷である八名郡船着村だ。豊橋からの距離は拾五里、その吉川部落は四方山に囲まれた山間の小天地で戸数は百六、七十戸。そこには親戚もあれば旧知もある最悪の場合は先づここに避難しやうと思ふ。

この場合は勿論家財道具に目をとられて居る暇はないからほんの身の廻りだけで着のみ着のまゝ、婆さんと二人で行くのだ。さういえば余りに命をおしむやうだが今更犬死だけはしたくない。然しそれは最後のことで真先に逃げ出すやうな不様なことはしたくない。私はこの決心で今暫くはこのまゝ、その日その日を善処してゆくであらう。

今日家産家財蔵書などに戦時保険をつけながらこんなことを考えて見た。

[解説] この日は00時10分に警戒警報が発令（約10分後解除）され、05時30分に2度目の警戒警報が発令された。「浜名湖附近から侵入した敵一機が愛知県の東部上空を旋回中」で「西方遙かあなたにバラバラの火が落ちる」のが見え

た。3度目の警戒警報は10時00分に外出先で発令された(30分後解除)。帰宅の途中3機のB-29を確認した。

日誌には敵機動部隊の日本近海への出沒が噂され、敵の本土上陸の可能性も否定できない情勢にあることが記されている。その根拠として「浜名湖から西へ渥美半島一帯が敵の上陸には持て来いの地形」をあげているが、「真先にこの附近が戦場にならうとは考えられぬとの説もある」とも述べている。庶民の日常生活の中でこうした話題も会話に上っていたということであろうか。この日は、最悪の場合には「生まれ故郷である八名郡船着村」に避難することも考えた。

5日、F-13は、1月3日の名古屋空襲の損害評価のための写真偵察を行った。しかし名古屋は雲のため撮影できず、豊橋、浜松、静岡などを撮影した²⁴⁾。3回の警報のうちF-13に対応するのは、損害評価のための写真撮影任務と、飛行コースから見て10時の警報で間違いないと思われる。

名古屋空襲を記録する会(1986)によれば、5日05時10分～05時45分に警戒警報が発令された。1機のB-29が浜名湖から岡崎を経て渥美半島を海上に抜けたが、岡崎市に大型油脂焼夷弾を投下した(9頁)。上述の「バラバラ火が落ちる」はこの時のものと思われる。津の空襲を記録する会(1986)は、同日00時10分～00時18分、05時30分～05時51分、10時02分～10時35分の3回の空襲警報を記している(16-17頁)。

豊西村(1944-45)は3回の警戒警報を記録している。00時10分～00時28分「浜松東方ヨリ上陸、秋葉山、鳳来寺上空ヲ信州方面ニ進行セリ」、04時43分～05時47分「渥美半島ヲ浜名湖ニテセンカイ、静岡富士山上空を甲府方面侵入セリ」、10時00分～10時29分「御前岬西方ヨリ侵入、静岡、沼津、富士山東方ヲ関東地方へ侵入」となっている。

原田良次(1973年)によれば、「〇五〇五

B29一機静岡に侵入ののち関東西部に来襲。夜は二一〇銚子よりB29一機東京へ侵入して投弾」(115頁)した。

一月六日(土)

(38) 寝について間もない午後八時半また警戒警報が発令された。静岡県下へ侵入した敵機は甲府を迂回して帝都を襲ふと見せかけ反転して名古屋へうせたといふ。暫くする西から東へ爆音を曳いて頭上を通過する一機にけた、ましく退避の鐘が鳴る。敵に違いない。たゞ一機だ。次の情報に敵は岡崎、豊橋の上空を経て浜名湖附近から南方洋上に逃走中だと。間もなく警報は解除となる。時に八時四十分。ほんの僅かの間の出来事だった。

侵入一機 行動不明

[解説] 20時30分に警戒警報が発令された。敵機は、静岡県下から侵入したのち甲府、名古屋、岡崎、豊橋を経て浜名湖付近から離岸したようであるが、わずか10分で警報は解除された。

名古屋空襲を記録する会(1986)によれば、この日、B-29が1機、浜松から侵入し飯田、名古屋、豊橋を経て海上へ抜けたとしている。警戒警報は20時16分発令、21時00分解除となっているが、東春日井郡に焼夷弾を投弾した(9頁)。津の空襲を記録する会(1986年)は、この日の警戒警報は20時25分～19時29分としている(16-17頁)。

豊西村(1944-45)によれば、19時33分警戒警報発令(20時00分同解除)「駿河湾ヨリ金谷、秋葉山南方ヲ蓬萊寺山、南信州侵入」、20時16分再び警戒警報発令(20時40分同解除)「志摩半島ヲ名古屋、瀬戸、鳳来寺山、浜松北方ヲ御前岬ヨリ脱去」と記している。2度目は復路ということであろうか。原田良次(1973)は、「〇五〇五B29一機銚子より侵入の情報」、この後は「一九〇〇ごろよりB29単機で静岡へ。終日待機なり」(116頁)と記している。

24) 工藤洋三(2013)175頁。

一月七日（日）

(39) 真夜中の午前〇時半またしても警戒警報のサイレンが鳴り出した。少数の敵機が名古屋をめざしてしつこくまたうせたらしい。何処をどううろついているのか、それつ切り音沙汰がない。一時をすぎ暫くすると西から爆音が聞へ、退避の鐘が鳴り出した。出て見ると爆音は北寄りを東にぬけてゆく。敵機に違いない。何分にも骨を刺すやうな季節風にゐた、まれず、家へ入つてたき火に暖をとりつゝ待機すると、お茶の沸いた頃警報が解除になつた。時に午前一時半。

侵入一機 名古屋、浜松 焼夷弾投下

空襲の頻度から見て敵の戦意も相当なものだが少数機を以てする夜間襲撃などは全くの厭がらせに過ぎない。とはいへ少数機でも油断をすれば大敵で爆弾も持て居れば焼夷弾も持て居る。そのいやがらせの夜間空襲が悲鳴を挙げる訳ではないが苦手（ニガテ）なことは事実だ。何故かといえば夜間は敵味方の識別が困難なことが第一。所在の適格な判定が出来ないことが第二。寒さに堪へ兼ねることが第三。度々のことで睡眠不足に陥ることが第四。灯火管制による不便が第五だ。それらの悪条件を突破して勇敢に郷土防衛に必死となつてゐる姿は相顧みて頼母しい限りだ。

然しそれも慣れるに従て爆音によつて敵味方の識別が出来るやうになる。所在も大抵は判断がつくし真上にあらざる限り危険はない。寝起きに寒風に曝されるのは閉口だがそれも身支度と心の持ちやう一つで睡眠不足も国家の安否を双肩に担ふ銃後国民の試練だと思へば何でもない。まして灯火管制の不便などは心構へによつて解決される問題で敵の目的もそこにあると思はねばならぬ。

第三十六回に敵め焼夷弾を岡崎に撒いていつた。これは洩れた灯火をめあてに撒いたらしい。その落下点は前々から管制が不十分な所だつたから自業自得ともいえるが、二三大着者のために全体が危険に曝されるのだから一般のためには気の毒だ。それに解除になるとすぐ点火するものがあるが、それを見て敵が引返さないとも限らぬから注意がいる。灯火許りでない。何事も少しの油断で大事を招くことが少なくないから注意が肝心だ。こども命のやりとりを

する戦場だといふことを忘れてはならない。ここまですべて書いてくるとまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。

(40) 暁方になつてまた来さうな予感がしたので、四時に起きお茶をのみながら空襲に対する心構へを書いて居ると、丁度午前六時、今明けやうとする暁のそらにサイレンが鳴り渡る。獣めまたうせたのだ。情報では飯田の方から名古屋をめざす敵機があるといふ。静岡県から侵入し大廻りをしたのだろう。寒さも忘れ出て見ると爆音が北寄りに聞へるから大丈夫。もう名古屋を経てここまですえたのだ。ふと見ると東の山向ふでバラバラと火が落ちる。五日の朝西の方に見たと同様敵の焼夷弾投下だ（これは後に新居へ投下したとき）。憎らしいとも何とも云ひ様がない。そのうちに情報で敵は浜名湖附近から洋上に脱去したと伝へ間もなく警報が解除された。この間僅かに二十分許り。

侵入一機 焼夷弾投下

敵の空襲も回を重ねて丁度四十回。誰やらが生死の巷に出入すること三十六回といつたが。我々は今四十回生死の巷を出入したのだ。初めはたれしも多少危惧の念を持つたものだが、慣れては肝玉も太くなり又かといつた調子で恐れるなんて気持ちは微塵もない。これは全く経験の賜で、大体飛行機の性能から見て真直に向つてくる奴の外に絶対に危険がない。敵の高度はいつも七八千mから一万メートル。真上と思つても大分横にそれて居る。たとへば五日のやうに市の中央をいつたと見へたが、それは表浜の海岸を東にいつたのだといふ。まだ爆弾も焼夷弾も市として一度も見舞はれてゐないが、爆弾だと一万メートルから落すと四十五秒かゝる。その間に四十五度位に見へた敵機が丁度頭上に来て居る。その四十五度位に見えるのが一番危険で、真上までくれば爆弾の炸裂がない限り危険はない。然らば爆弾の到達をいかにして知るか。これには形状と音響とによつて弁別出来る。即ち敵機より投下した弾が真丸に見へたら最も危険で、この場合は二十歩でも三十歩でも移動して退避の必要があり。それが初め丸く見へても続いて茄子型に見へたら壕に居る限り安全で余程離れた処へ落下する。またその空気を切る音がブルンブルンと聞へたら最も危険でビューン

と聞へたら落下点は余程離れた所だといふ。

次に焼夷弾には大小いろいろあるが中には四斗樽位あつて初め油脂が燃へ中頃黄燐弾が乱玉のやうに飛び出すのもあるが、多くは途中で分解するバラバラ焼夷弾で、これなら一人で三十も五十もあつさり形付た例もあり、恐れることはないさうだ。たゞ恐れるのは早く見付け早く処置することで退避壕のうちにすくんでみて知らずにゐることだ。だから退避信号で壕に入つても二三分で敵機は頭上を去るからいつまでも壕にゐず、すぐ飛び出して点検することだ。この機敏な処置が強く要求されてゐる。然も時には爆弾を混用する場合があるから、波と波との間を縫つて活動せなければならむさうだ。

まだこの地方では爆弾も焼夷弾も見舞はれてゐないからこれに対し老人でも女でも機敏の処置がとれるかどうか聊か心懸りだが、燃え出した処で市中と違つて一軒か二軒だから大事に至るやうな心配はせんでもよからう。たゞ一致団結して事に当るより外に仕方はない。隣の焼けるのを見て家の荷物を運び出し救援もしないやうなものがあつたら、それこそ国賊だ。断じて赦してはならむ。

已に四十回に達する空襲をうけたといつても数十機でやつて来たのはたゞ四回だけだ。これをドイツに見るやうに千機二千機といふには較べものにならぬ。まして一機や二機で偵察ながらにやつて来たのを空襲の数に入れるのは耻(恥-筆者)しい位だ。やがてはもつともっと大仕掛な空襲を受ける時が来るかも知れない。その時に備へて今からしつかり腹を作つて置くことだ。自分は今痛切にそれを思つてゐる。(41) 夕食を済ますとすぐ寝て仕舞つた自分が、ふと眼を醒ますとサイレンが鳴つて居る。はね起きて時計を見るとまだ宵の口の八時半だ。出て見るとあたりは夜目にも白く雪がつもり、その上を北風が吹き荒れて居る。情報も聞かず敵機の行動も明かでないが、何れ名古屋をめざして少数機で来たのだらう。たき火に暖をとりながら外の様子に耳をそばだてゝゐたが、それつ切り音も沙汰もなく、三十分許りで解除になつた。

侵入一機 焼夷弾投下

[解説] この日も00時30分の警戒警報に始まった。

退避の鐘がなるものの01時30分に解除となつた。「名古屋、浜松焼夷弾投下」とあるが、浜松に爆弾投下の記録はない。夜間空襲が苦手な理由や空襲に対する心構えなどを日記に記した。4時に起きて続きを書いているとまた警戒警報のサイレンがなつた。時間は06時00分、06時20分解除。この時は「東の山向うにバラバラと火が落ち」のが見え、後に新居に焼夷弾が投下されたと聞く。日誌に書かれた心構えを読むと、翌8日の内容もそうであるが、B-29の爆弾投下や焼夷弾についての知識がかなり正確であるのに驚く。21時30分にこの日3度目の警戒警報が発令され21時00分に解除された。

名古屋空襲を記録する会(1986)は、00時18分～00時52分と20時29分～20時57分の2度の警戒警報を記録している。いずれもB-29、1機で来襲しそれぞれ愛知郡と中島郡に焼夷弾を投下した(10頁)。津の空襲を記録する会(1986年)は、00時20分～01時21分、05時55分～06時15分、20時25分～20時42分の3回の空襲警報を記録している(16-17頁)。

豊西村(1944-45)も、00時27分～00時56分に1度目の空襲警報が発令され、「御前岬ヨリ浜松東北方ヲ秋葉山、蓬萊寺(鳳来寺一筆者)、南信州へ侵入シ松本ヨリ反転」とし、2度目(01時08分～01時33分)は「岐阜ヨリ名古屋へ再ビ浜松東北方ヨリ御前岬西南方海上へ脱去セリ」、3度目は他の地域と時間が異なり、しかも午前か午後か不明であるが警戒警報は「五時〇分～六時十三分」に発令され、「浜松南方ヨリ上陸、秋葉山上空ヲ蓬萊寺方面へ進行」と記している。

原田良次(1973)は、「〇五〇一警戒警報あるというも知らず。…B29一機、甲府まで進行したとのこと」(117頁)と記すにとどまっている。

一月八日(月)

(42) 時も丁度昨夜と同じ午前〇時半。又々警戒警報のサイレンが鳴る。はね起きて見ると宵曇つてゐた空は全く晴れ渡り、満天に星が輝いて居る。情報

をきくと紀伊半島から侵入した奴が奈良県、滋賀県を回つて名古屋に向ふらしいといふ。忽ち西の方から爆音が聞え、所々で退避の鐘が鳴る。もう名古屋も通つてここまで来たのだ。それが南に寄つて聞るので危険もあるまいと、見へぬ敵機を見送つてゐると爆音もまもなく暗に消えて仕舞つた。折柄月齢二十四の半月が東の山から顔を出し、暗い心を慰めてくれる。馬鹿に寒い夜だつた。一時間許りで警報は解除、熱いお茶を一杯のんで床につく。

侵入一機 焼夷弾投下

敵が対日爆撃機と呼号するあの憎らしいB二十九。こやつは時速六百キロといふが大体四百五十キロから五百キロ程度で、マリアナから内地まで約二千五百キロで片路五時間、滞空一時間と見ても先づ全部で十一時間といふ所らしい。

これを今仮りに五百キロとすると、一秒間約百四十米。有名な室戸台風が約四十米だからその三・四倍の速さ。これが内地へ到達してから名古屋迄の時間は

- ・大坂から 二〇分
- ・志摩半島から 一五分
- ・御前岬から 一八分
- ・浜松から 一五分

で豊橋からはせいぜい十分。それだから関ヶ原附近を名古屋に向ふらしいという情報が入つたときもう頭の上に敵機が来て居るのだ。

こういふことも頭の中に入れて置かねばならぬことだ。

(43) 午後九時半を過ぎて間もなくまた警戒警報が鳴り出した。敵め今度は方向を変へ紀州から侵入し奈良、滋賀二県を経てやつて来た。間もなく空襲警報のサイレンが鳴る。但しそれは中地区のを間違へたので十分許りで解除を鳴らし、警戒警報のやり直し。誰かしらぬが馬鹿に慌てたものだ。

滋賀県から名古屋に向ふ情報を聞いて西の方を注意して居るとパツパツと夏の夜の稲妻のやうに二三次迄も明るく見へる。敵近しと思ふまもなく例の特長あるウンウンの爆音だ。此処彼処で退避の鐘が鳴る。忽ち一条の照空灯が敵影を追ふ。真上を少し北寄りに爆音が聞へるので大丈夫とその穂先を見詰めてゐたが、うまく捕捉出来ぬらしい。まもなく爆音は闇に消え情報は浜名湖附近から逃走したと伝へ

四十分許りで解除になつた。風もない薄曇の静かな夜で星はかすかに光つてゐた。

侵入一機 焼夷弾投下

[解説] 00時30分警戒警報 (約1時間後解除)、情報によると紀伊半島、奈良、滋賀、名古屋のルートらしい。21時30分過ぎこの日2度目の警戒警報 (22時10分頃同解除)、近くの高射砲陣地からの照空灯が敵影を追うのが見えた。この日は「頭の中に入れて置かねばならぬこと」として、B-29の飛行速度からサイパン島から日本への到達時間や日本本土各地に上陸してから名古屋までの到達時間を計算している。

名古屋空襲を記録する会 (1986) によれば、00時40分～01時30分と20時37分～22時21分の2度の警戒警報が発令された。いずれもB-29、1機で、1度目は潮岬→伊勢湾→名古屋→豊橋のルートで瑞穂区、熱田区に投弾、2度目は潮岬→奈良→滋賀→名古屋→浜名湖のルートを通し、この時は中川区、熱田区、昭和区に焼夷弾を投下した (10頁)。津の空襲を記録する会 (1986) は、00時45分～01時30分に1度目の警戒警報、21時45分警戒警報発令、21時47分空襲警報発令、22時21分空襲警報解除、22時26分警戒警報解除となっている (16-17頁)。

豊西村 (1944-45年) は、00時40分～01時35分に警戒警報発令、「名古屋方面ヨリ浜松北方ヲ御前岬南方へ脱居」と記している。松戸基地は、「一日平穩にして情報なし」であった。

なお、B-29による気象偵察爆撃については、森祐二 (1996) 「太平洋戦争期のアメリカ空軍資料 (1)」 (大阪国際平和研究所『戦争と平和』Vol.5) によれば、いずれも第73航空団により1月6日東京ドック地帯 (3機)、1月7日名古屋市街地 (3機)、1月8日熱田造兵廠 (3機)、1月9日熱田造兵廠 (3機) などとなっているが、これについての検討は次回以降の課題としたい。

一月九日 (火)

(44) 午前〇時を少し過ぎた頃警戒警報のサイレン

に眼を醒ます。畜生またうせたかとはね起き戸外に出て見張りながら情報を聞く。敵め今度も潮岬をめあてにやつてうせ、そこから折れて東北に向ひ名古屋を襲ふ如く見せかけ反転して琵琶湖の上に出た。京都へでも行のかと思ふと又々東に向を換へ名古屋をめざしてくるらしいと云ふ。耳をそばだて見張つてゐると西の方低空で二度までもまた稲妻のやうにパッと明るく見へる。来たなと思ふと微かながら例のウンウンが聞へる。一條の照空灯が大空に向つて流れ出した。爆音はいよいよ近くなつてくる。どうも頭の上を通るらしい。八釜敷い程あちらでもこちらでも退避の鐘が鳴る。早速婆さんと呼んで壕に入れ、照空灯の穂先を見つめて居ると、初め北寄りだったのが真上を通つて南寄りに移つた。その先きに敵機が居るらしいが姿は勿論見へない。程なく爆音は闇のあたなに消へ、照空灯も消へた。そして敵は浜名湖附近から洋上に去つたとの情報について警戒警報も解除になった。敵め途中でまごまごしてゐたかお蔭で前後一時間、癩にさわること夥しいが先づ先づ事故なく済んでよかつた。たき火に暖をとり熱いお茶一杯のんで再び床に入ると二時を打つた。

侵入一機 焼夷弾投下

(45) 冬の夜はまだ明けやらぬ午前五時、けた、ましく三度目のサイレンが鳴り出した。獣めがまたうせおつたのだ。よくもこうコソ泥式にうせたものだ。たつた一機と多寡をくくつては居るもの、捨ててもおかれず出て監視に当る。暁の風は身を切るやうにつめた。情報によるとやはり前と同様熊野灘から侵入し奈良、滋賀両県を経てやつてきたのだ。程なく退避の鐘が方々で鳴り出した。成程西の方から例のウンウンが聞へてくる一條の照空灯が大空に流れその穂先は北寄りに爆音を追つて居る。愈々近づいたなと思ふトタン照空灯がパッと消えた。ウンウンは二川方面さして段々遠ざかつてゆく暫く見送つてゐると遙かあなたから微かではあるがドドンと地響きが伝はつて来た。敵め行き掛けの駄賃に一つ投弾したのではなからうか。

かくて敵は南方洋上に去り前後三十分許りで警報は解除、時に午前五時半、夜はまだ明けやらぬが婆さんに朝餉の支度にかゝつてもらつた。

侵入一機 焼夷弾投下

(46) この三日に本格的な空襲があつて今日で六日目。それに二三日来の頻々たる少数機の夜襲もあり、今日あたりまた大挙してくるなと心待ちしてゐると、午後一時少し過ぎ果して大挙して敵めがやつて来た。それも今迄同じ方向から数梯団できて叩きつけられたのに懲りてか今日は伊豆半島から潮岬にかけ二三機宛バラバラに侵入して至る処の空を荒らし廻つた。そして三時頃までに大方南方洋上に遁走したのであるが、初めて我が豊橋市にも爆弾を投下し、女子供を縮み上らせた。何分初めてなので無理もない。そのあらまはこうだ。

最初に侵入したのは潮岬からの二機編隊で京坂方面に向ひ、それを迎え打つためか浜松から味方戦闘機が七機づゝ二隊西に向つて駆けつける。間もなく東南方に飛行雲を曳いた敵の二機が現れた。それをめがけて高射砲が打上げられると大きく旋回してもと来た方へ逃げてゆく。それとは別に敵三機編隊が北の方を名古屋めざして西進し、少し距れてまた一機がその跡を追つてゆく。まもなく東から真上をよぎる一機に退避の鐘が鳴る。それは味方の戦闘機だった。その頃西の空には幾つもの飛行雲が現はれ、それが二手に別れ左へ四機右へ二機、その二機が本宮山の上までいつたところ、どこからとなく別の三機が加はり北に進んでゆく。再び退避の鐘がけたたましく鳴る。ふと南を見ると鮮やかな飛行雲を曳いて八機編隊が頭上に迫らんとして居る。それが真上を通るときガワガワといふ物すごい落下音だ。爆弾と直感し、婆さんを壕に入れ自分も半ば入りかけるとたんづシーンと来た。敵はもう通りすぎ後につゞく危険はないと飛び出して見ると、西北に当つて黒煙が濛々と渦巻いて居る。余り遠くはないらしい。敵はそのまま北に向つて進んで居る。その頃敵は西方にも居るし南方にも居る。爆弾を落した憎い敵機は北方で東に向をかへた。何分どの方面にも敵が居るので監視するのも大抵ではない。

三時に近く敵も漸く遠ざかつてゆく。南に逃げる敵一機の飛行雲が日光に映じて素的に美しい。間もなく空襲警報は解除。少し時間を置いて警戒警報も解除された。敵は今日所々へ爆弾やら焼夷弾を投下したが我が豊橋市へは飽海と磯辺へ落したといふ。我々の耳をうつたのは飽海に落ちた爆弾で民家が

二三軒フツ飛んだといふ。勿論戦争といふ範疇からいへば損害など大したことはない。然し、初めての爆弾であり近くの女子供はさぞ驚いたことだろう。

来襲約六十機 撃墜十一機、撃破十八機

午後六時少し前、南方から真上少し西寄りをよぎる五六機の一編隊がある。警報は出てゐないが爆音がどうも味方機らしくない。数ある内には突然空襲を受ける場合もあり得るのだから油断なく見送つてゐた。それつ切り何の音沙汰もない所を見ると味方機だったのだろうが、一時は一寸緊張せざるを得なかつた。実をいふにまだ私らの耳には爆音による敵味方の識別がはつきりついてゐないのだ。



第17図：1945年1月9日の飛行ルート

[解説] 午前零時過ぎに警戒警報発令、名古屋方面へ来襲、「西の方低空で二度までもまた稲妻のやうにパッと明るく見へ」、やがて夜空に一条の照空灯が走った。午前五時には再び警戒警報発令（05時30分解除）。B-29は「二川方面として段々遠ざかつてゆく暫く見送つてゐると遙かあなたから微かではあるがドドーンと地響きが伝はつて来た」。

午前中の2度の来襲について名古屋空襲を記録する会（1986）は、00時02分に1度目の警戒警報が発令（00時48分同解除）され、04時50分に2度目の警戒警報が発令（05時27分同解除）されたとしている。いずれもB-29、1機が潮岬→伊勢湾または琵琶湖→名古屋→豊橋を通過して海上へ脱去した（10-11頁）。津の空襲を記録する会（1986年）の警戒警報の発令と解除の時間はほぼ同じである（16-17頁）。

豊西村（1944-45年）はコースについては異なった記述をしている。00時12分警戒警報発令（00時40分同解除）「御前岬ヨリ静岡、富士山上空ヲ甲府方面へ進行」、04時50分2度目の警戒警報発令（05時31分同解除）「天竜川口ヨリ浜名湖北方ヲ信州方面へ侵入セリ」。

日誌によれば1月9日は13時過ぎから、予想通り（?）、1月3日に続いてB-29の大型部隊による爆撃が行われた。南から迫るB-29が真

上を通るとき「爆弾と直感し、婆さんを壕に入れ自分も半ば入りかけるとたんツシーンと来た」。そして「西北に当つて黒煙が濛々と渦巻いて居」た。

この日の第1目標は、中島飛行機武蔵製作所で、牽制目標として大阪が指定された。野戦命令書は、主力部隊72機は熊野灘（26° 30' N・137° 00' E）を北上して大王崎（34° 15' N・136° 55' E）に上陸、そこから右旋回し浜松上空を通過して攻撃開始点（IP）へ向かうとした。この日、IPに指定されたのは甲府市（35° 40' N・138° 34' E）で、ここを起点として攻撃目標に向かい、爆撃後は房総半島から太平洋上（34° 00' N・141° 15' E）へ離岸する予定であった。また、牽制部隊3機は、蒲生田岬付近（33° 50' N・134° 40' E）から上陸し、小豆島西北端（34° 34' N・134° 20' E）をIPとして大阪に向う計画であった（第17図参照）²⁵⁾。

作戦任務報告書によれば、主力部隊は全航程を通じて悪天候のために編隊飛行は困難であったと述べている。一方、牽制部隊は、レーダー対策用ロープを散布したさいにそれがレーダー・ドームにぶつかってレーダーを故障させたため、密雲に覆われた大阪の爆撃をあきら

25) 「作戦任務報告書」No.18。

め、徳島飛行場の爆撃を試みた。

結果的に、悪天候のため主力部隊72機のうち、第1目標を爆撃したのはわずか18機、最終目標に指定された東京市街地を爆撃したのは1機のみであった。32機（牽制機をふくむ）は臨機目標を爆撃したが、残りの機は爆撃に失敗し、17機は爆弾を投棄、2機は基地に持ち帰った。臨機目標への投弾は広範囲におよび、浜松、豊橋、静岡、沼津など22カ所、投弾量も第1目標へのGP168発、42トンに対してGP314発、78.5トンに上った。第498群団の2機が浜松、1機が渥美半島の飛行場、1機が浜松の近くを爆撃、第497群団の1機が浜松、1機が豊橋を、第499および第500群団の各1機が浜松を爆撃したとされる²⁶⁾。

名古屋空襲を記録する会（1986）によれば、この日13時05分に警戒警報、13時30分に空襲警報が発令された。B-29約20機が瑞穂、南、豊橋、田原に投弾したが、被弾したのは豊橋・田原地区では大山町、梅田町、小^マ□□町、大崎海軍補給部海面、渥美郡では伊良湖岬村、赤羽根村であった（11頁）²⁷⁾。後述するように、日誌の筆者はこの日の着弾跡の一部を翌日見学して回った。また、浜松空襲・戦災を記録する会（1973）によれば、浜松ではB29、2機が宮竹町、和田町、長上村などに投弾した（290および292頁）。

一方、飛行ルートと悪天候によるためか日本の戦闘機による攻撃は約150機により200回と予想より少なかった。また、目標上空の対空砲火は中程度、不正確であった。しかし、米軍は6機のB-29と67人の搭乗員を失った。日本側の戦果について第十飛行師団長は、日記に撃墜確実11機、不確実4機等とし、このうち「飛行第244戦隊の…は小平付近（立川北東方）で…体当たりを敢行し、B-29二機を撃墜した。また飛行第47戦隊の…は体当たりを行ないB-29四機

撃墜を報じた」と記した²⁸⁾。

（つづく）

受稿：2012年12月27日

受理：2013年1月24日

26) 同上。

27) 『豊橋市史』等によれば、1月9日に被弾したのは東田町、牛田町となっている。

28) 戦史室（1973年）435頁。

